

季刊 現代中国 2

(一九七二年六月) (経済紀要誌)

対談

毛沢東思想と個人崇拜

- 1 スターリン批判が中国に与えた影響
- 2 毛沢東崇拜はスターリン主義的か
- 3 個人崇拜と毛沢東語録の役割

菊地昌典
(東京大学助教授)



中嶋嶺雄
(東京外国語大学助教授)



スターリン批判が中国に与えた影響

菊地 ソ連が中国における毛沢東個人崇拜に関心をもったのは、文化大革命の時だ。一九五六年に有名なフルシチョフのスターリン批判というのが行なわれて、あの二〇回党大会の秘密報告の中で、スターリン個人崇拜とすることが初めて持ち出された。それまでは、国際共産主義運動にスターリンの果たした役割というものは、中国を含めて巨大なものがあったと思うのだが、そのマイナス面というものを、ソビエト史の中に位置づけようところをみた最初の歴史的な大会がこれだった。ところが、中ソ論争が激化してきて、ソ連はアルバニアを、中国はユーゴスラビアをいけにえの羊に仕立てて批判しあっていたわけだが、だんだん中国とソ連の真向からの対立になり、しかも、たんなる外交政策とかマルクス・レーニン主義の解釈という理論面にとどまらず、中国とソ連との両国家体制の問題にまで論争が食い込んできた段階、——そういう国家体制の相互批判というのが始まったのが、六八年、六九年で現在まで続いている。

ソ連のほうはかなりはっきりと毛沢東の個

人崇拜や毛沢東の軍事独裁国家が成立した、つまり、文革でそれが成立したという見方をとり始めてきた。ソ連側は、毛沢東の個人崇拜というものを、三〇年代から五〇年代半ばまでのスターリン個人崇拜ときわめて類似した社会現象としてとらえた。そこが、私には非常に引つかかる。ソビエト史における三〇年代と中国史における五〇年代、六〇年代というものを、同じパターンとしてとらえるところ、そこに方法的欠陥があるように思う。同時に、それを個人崇拜ということばでかたづけしてしまうほど、ソ連におけるスターリンの役割が同じかどうかということ、まず自身の考察の出発点にいつも置いている。

中国は、ご承知のように、フルシチョフのスターリン批判というものに、「プロレタリア独裁の歴史的経験について」、さらに「再論」という形で、その批判の仕方にクレームをつけたわけだが、やはり、最初の段階ではフルシチョフの個人崇拜批判、スターリン批判の意義を一定の時期認めていたと思う。それが、だんだんとソ連側からする毛沢東独裁体制に対して、今度は逆に、スターリンの個

人崇拜というものに対するソ連共産党の取り扱いはおかしいという形で、ソ連の共産党中央委員会の公開書簡に対する批判が幾つか出されて、その中でスターリン問題というのは第三番目に位置づけられるし、有名な第九番目の批評では、ソ連における特権階級の復活、ソ連の社会体制批判として打ち出した。そういうアナロジカルなとらえ方をどう考えたらいいかということだが。

中嶋 私も、現在のソ連による毛沢東批判そのものが、自分のところの問題をタブーにしておいて、毛沢東の個人崇拜とか軍事独裁主義、排外主義を非難しているという点では、菊地さんと同感するところがある。その点では、ソ連の中国批判が説得性に乏しいということがいろいろある。チェコ事件におけるソ連の立場と中国を毛沢東思想に基ずく排外主義、軍事独裁主義と非難する立場とは一体ではないのかという問題がある。

中国の場合、やはり中国革命の段階での中国共産党と一応中国でプロレタリア独裁が成立したとみなされる五〇年代後半以降の、中国共産党の権力が、いわば全一的なものになってからの中国共産党との間に、あるいは毛沢東自身との間に、非常に大きな変化があるように思う。ご承知のように、中国共産党は

かつて、個人崇拜の弊害に対してかなり自覚的であった。毛沢東の誕生日を祝ってはいけなとか、町の名前に毛沢東の名を冠してはいけなとか、そういう経過がいろいろある。

毛沢東にかんしても、毛沢東思想という一つの体系として絶対化しはじめたのは、四五年の七全大会における劉少奇の党規約改正報告だが、党規約の中でも毛沢東の貢献を非常に高く評価し、毛沢東思想が中国におけるマルクス主義だということを使う。ところが、五六年の八全大会では、党規約改正報告（鄧小平が担当）の中でも、毛沢東思想ということばは一言も出てこない。これは明らかにスターリン批判の影響だろうと思う。

一九五六年の二月にソ連の二〇回党大会、九月に中共の八全大会が開かれていて、その間にスターリン批判に関連して「プロレタリア独裁の歴史的経緯について」という論文を出した。あの頃は中国にとって個人崇拜とか、毛沢東思想の絶対化とかは必要がないということが一番自覚していた時期で、あの時のプロ独裁についての論文というのは、非常にすぐれたものだ。ところが、そこで出されていた、社会主義の中にも矛盾があるんだ、その中で社会主義社会内部の弊害を、みずから

の誤りとしてチェックしていかなければならないという発想が、二回目の論文ではすでに消え始める。ハンガリー事件でのソ連の軍事介入は正当なものだということ合理化し始めた。ハンガリー事件というのは、完全にベトフィ・クラブにつながる帝国主義の手先がやったんだ、あるいは西ドイツがやったんだという、単純な見方に立って、社会主義の中に問題があって、その結果としてハンガリー事件が起こったんだということ認めようとする発想が消えていくわけでしょう。その過程というのが、私は非常に重要だと思う。そのころ、五六年の一月に周恩来が知識人の問題について報告している。知識人の積極的活動を呼びかけた。また毛沢東は五六年四月に「十大関係について」というような、これまで未公開の、有名な報告をおこなっていて、党と指導者との関係とか、指導者と大衆との関係など、権力をもつ者が自覚的に注意していかなければならない問題について、いろいろ言い始めた。その頃の中国の動きには、あの意味ではスターリン批判によって触発された面もあるが、すでにそういう弊害を是正していたという自信もあったし、そういう努力もされていた。ところが、やがて、ハンガリー事件に対する評価あたりからおかしくなっ

てきて、一方では五六年当時から百花斉放、百家争鳴運動を知識人に呼びかけるが、なかなか応じてこない。やがてそれを党中央が大衆運動として呼びかけて放鳴運動が実現したが、やってみたら、もの凄く党に対する批判が出る。それでも毛沢東が五七年二月に「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」という報告をする。これはおそらく今発表されているものとニュアンスが違うのですよ。かなり大衆の批判の自由ということを積極的に呼びかけていると思う。それで大衆運動化してみたら、党に対する批判、党内からの批判が出始めた。そのためにそれを全部押えたのだが、その時に、幾つか基準を設けた。発表された「人民内部の矛盾」論をみると、その基準に引っかけられるものは全部社会主義の毒草であるという形で、毛沢東が全部押えてしまった。いわば社会主義における批判の自由とか、民主主義とかいう問題に対する毛沢東の大きな禍ちがあったと思う。それ以降の過程が文革にまで至るわけで、その辺のところは、じつは中国自身の内政面における大きな転換があった。内政上の民主主義は消去り、また、つまり、批判する者をすべて毒草と見るところから内政上の民主主義は消去り、また対外的には中国ナショナリズムを強く打ち

出して行くという形になっているので、内政面における民主主義の欠如というものは、ナショナリズムの性格をそして外交政策をも変えていったと思う。

スターリンと毛沢東のちがい

菊地 フルシチョフのスターリン批判に対する国際共産主義運動の反響を見ると、やはり、イタリアと中国のそれが独特だ。他には批判的にそれを受け止めて、さらにそれを前進させる、あるいは国際社会主義運動の発展のためにいかにしてそこから教訓を引き出すかという姿勢はなかった。

中国共産党の「プロレタリア独裁の歴史的経験」という最初の論文は、批判のやり方そのものについては、別にクレームをつけているわけではない。ただ、スターリンが禍ちを犯したことは認めながらも、その禍ちの処理の仕方が間違っていた。それについてのフルシチョフ秘密報告批判であった。私はいまでもフルシチョフの秘密報告なるものを読み返しますと、国際共産主義運動の理論的指導者と言われる者が、ああいう批判をせざるをえなかったという状況がある程度わかると同時に、やはり、あれでは問題は一步も解決しないというふうに考える。

その批判のやり方というのは、非常に低次元のやり方だ。なぜ、秘密報告の批判のやり方が問題かと言え、社会主義の建設過程で、スターリンの個人崇拜が形成されたというが、レーニンの個人崇拜というものは形成されなかったのか。スターリンの個人崇拜というのは、かなり人工的な面が強い。つまり、ロシア革命の時に果たしたスターリンの役割というのは些少なものであって、レーニン、あるいはトロツキーに比れば、数段下のレベルで動いていた一民族理論家にすぎず、彼自身が少数民族出身ということもあるし、ロシア共産党という大ロシア人が主流を占めているポリシエビキの中では、非常に低い地位にあった。

しかし、民族問題というのがロシア革命以後クロースアップされてくるに従って、スターリンが登用されてくる。だから、スターリン自身も、いつも、私はレーニンの忠実なる弟子にすぎないと言っている。私はレーニンと同格である、あるいは上であるということをして、彼自身は論文の中で言っているわけではない。

実際面としては、彼は二〇年代後半、トロツキーらとの闘争の中で、それを絶滅していくというプロセスを経て、三六年に有名な

「もうすでに階級社会ではなくなった」という宣言を出す。それが新憲法に結晶していく。ですから、私は中嶋さんのお話を聞いていて、個人崇拜の形成のされ方もかなり違っているのじゃないか。たとえば毛沢東というのは、中国共産党のリーダーの一人であるということとは確かだし、きわめてユニークな路線をコミンテルン路線に対して採った。そして、中国共産党の下に中国革命を成功にまで導いてその後ずっと社会主義建設過程の中で、毛沢東の名というものが、ある意味では、民衆に崇拜されてくる。

私は、崇拜ということそれ自体は、べつに否定すべきものでも何でもない、民衆が自然発生的に建国の父、革命の父であるリーダーを敬愛するということは否定すべきことではないと思う。否定されるべきことは、その個人崇拜を人工的に作り上げて、しかも、その個人に対する批判、あるいは反批判というものに対して、人身的弾圧を加えていく。警察や軍隊を使って、そういう非民主主義的な抑圧、プロレタリア独裁下における間違った抑圧ですね。だから、ブルジョアに対する抑圧は当然としても、社会主義の方向を目指す建設的な意見に対する弾圧というものが、肉体的な抹殺にまで至ったのが、いわゆる三〇年代の

スターリン時代の大粛清であったとみる。

スターリン自身のロシア革命に果たした役割と毛沢東が中国革命において果たした役割というのは、決定的に違う。その決定的違いが民衆の崇拜というものの量的、質的な差を形作っている。しかも、スターリンの場合には、階級社会でなくなったという段階での粛清であって、毛沢東の人民内部の矛盾とか、社会主義社会における階級闘争という、今度の文革の中で明確に出された見解とは違う。いろんな面で違うわけだ。

中嶋 中国の場合は、五六、五七年の段階というのは、ソ連の社会主義のいわゆるマイナス面の傾向を十分識って、同時に新しいそれまでにない社会主義をつくり上げたはずだ。しかも革命のプロセスが違うわけで、抗日統一戦線によって中国革命を完成した。ここでは基本的には人民民主主義独裁であって、多党制を認めながら、漸次的に一党独裁に移行してきている過程だった。あらゆる面でソ連とは違う経験を中国自身が十分にそこで見きわめ、そして、単に経験主義的に見きわめるだけでなく、それを社会主義建設の新しい理論として、仕上げをする必要があった。ところが、その点で、毛沢東あるいは中国共産党はそれをなしえなかった。先を急

ぎすぎた面があったという気がする。

それは、今日見てみると、やはり党内闘争があり、人民内部の矛盾に対する対処の仕方、発想としては非常に正しいものをもっているながら、そのやり方において失敗していたということだ。「人民内部の矛盾——」論というのを読んでいくと、全体的なトーンとしては、極左主義批判であって、人民内部の矛盾を、すぐ敵対的矛盾という形で処理するやり方を批判している論文ですね。党内闘争の方法として苛烈な闘争、苛責なき攻撃というようなものは、間違ったことだということを言っている。結局、党内闘争というのは、人民内部の闘争だろう、敵対的なものじゃないんだ。あくまで人民内部の矛盾として考えなければならぬと言っている。

そこで、党員の活動工作态度上の問題がある。大衆との間を乖離させて、大衆の積極性を阻害しているということを言っている。だから、その場合に人民内部のものであれば、どんな批判でもよいのだというのが、当時の発想だったと思う。

人民内部の矛盾とは何か

中嶋 それでは、一体人民内部と外との基準をどこに求めるか、その基準としてご承知

のように六つ毛沢東はあげている。社会主義に反対しないこととか、共産党のリーダーシップを認めることとか、そういうことを言っている。しかしながら、共産党のリーダーシップを認めるということなら、一体共産党に対する批判はどうするかということだが、これは毛沢東の本来の論理から言えば、敵対的矛盾ではないはずだが、現実には、敵対的矛盾として扱ってしまった。特に毛沢東の場合、政治的問題については、ある意味では押さえることが必要だが、こと思想上の問題、学術上の問題、つまり文化の問題において、押さえる方法は絶対とるべきでないと言った。ところが、反右派闘争以降の党内闘争においては次々に反革命だ、社会主義の敵だ、毒草だ、と進んだ。発想としては非常に大切なものを含んでいるながらも、結局はその時の力をもっているものの意見に従わざるをえないというふうになり替えられていったところに問題がある。

やがて明らかになったように、党の中では大躍進政策についても彭德懷らの反対があり、今日の段階では劉小奇も反対していたと言われるし、鄧小平が八全大会で、党の規約の中から毛沢東思想ということばを除いたのが、卑劣な陰謀であって、毛沢東に反対する

ものであったということを言っている。もっともこの点について、私はそれはあとからのこじつけであって、当時、劉少奇、鄧小平が反革命であったとは思えないし、文革においても私は劉少奇、鄧小平を反革命として、あるいは社会主義の敵として扱うべきではなかったと思う。毛沢東もその頃、「人民内部の矛盾——」の中で、階級闘争は基本的に終わったということを行っている。それが、やがて文革になると、これこそ階級闘争だということになる。劉少奇と鄧小平はまさに路線の違い、階級的な敵だという形になり、今度の林彪になって、また赤旗を掲げて赤旗に反対する卑劣な陰謀家であり、野心家であるという形になってくる。そうすると、永遠にそういう形でしか反対者を処理できないような悪循環が繰り返されていってしまうので、そこに中国共産党の大きな誤りがあったのじゃないかと思う。

もう一つは、毛沢東の矛盾に対する考え方なのですが、かつて「現代中国論」の中で私が明らかにしたように、ソ連の哲学界の影響を非常に受けていて、三〇年代の前半にソ連ではデボリーン批判がおこなわれて、一九三一年レニングラードの科学アカデミーから出た哲学教科書があるが、その教科書を材料

に、毛沢東は「矛盾論」、「実践論」を書いた。しかし、その頃の毛沢東はかなり矛盾を動態的に扱って考えている。それは、矛盾そのものを平面的にとらえる相互転化ということとでなくて、矛盾することそのものの中で、社会の発展があるという、円環として矛盾をとらえるという発想がある程度はある。それが「人民内部の矛盾」論になってくると、

毛沢東崇拝はスターリン主義的か

菊地 毛沢東崇拝が必ずしもスターリン主義的でないというのは、スターリンがやった大粛清という問題を全く毛沢東はやっていないということではないわけだが、非常に違っていると思う。

私はロシア革命というのは、ポリシェビキが確かに煽動というか、リーダーシップをとった革命であるが、あそこにはやはり左翼エスエルという全く違った農民を代表した革命党があって、ロシア革命後には連合政権となった。左翼エスエルとポリシェビキの両方から人民委員、いまで言えば、大臣が出て統治を行なうわけだが、それが崩れていく。クロンシュタットの問題についていえば、あそこで非常に重要なことは、クロンシュタットの

「矛盾論」の中にあつた毛沢東のそういう柔軟な発想というものも、ほとんどなくなっちゃう。基準を設けて結局は、敵か味方かにふり分けていくという発想ですね。権力をとつたあとの毛沢東と、それ以前の毛沢東の違いが非常に出ているような気がして、その意味では文革につながるものがその辺に出ているのじゃないかと私は見る。

真の最中に開かれていた第一〇回党大会で分派の形成を禁止するということが出される。だから、一〇回党大会の評価については二つに割れていて、研究者の中には、あれはレーニンのばあい、短期的なものとして考えられていた。クロンシュタットというような戦時共産主義段階での労働者の反乱というのを押えつけるのに成功するまでは、さし当たって分派を禁止するというように考えていたという意見と、そうではなくて、パーマネントに分派禁止ということを考えていたという見解があるのだ。私は前者だと思う。ところが、そういう分派禁止というようなことが制度化されてきて、結局スターリン時代に引き継がれていく。

ここで強調しておかなければならないのだが、トロツキーのスターリンとの論争、党内闘争というのは、いまから考えると、きわめてデモクラティックなんですね。さかんに文書を出している。なんか非常に陰惨なように見えるけれども、争いは短期間に終わって、その処理の問題も、それはあの段階で肉体的に抹殺するとかということはない。党員権の停止とか除名ということはない。スターリン時代のページとは違うし、私が毛沢東の個人崇拜というふうなものと、スターリンの個人崇拜というものを比較して違うと考える点は、三〇年代の大ページというものの規模、深さ、しかも、その大ページを支えるにあたって、党内において熾烈な闘争があったということになる。これは部分的に明らかにされているが、一九三七年三月三日のソ連共産党中央委員会総会、有名なスターリンの社会主義における階級闘争激化理論というのが、定式化された総会だが、しかし、あの段階でポストウィンシェフら何人かの中央委員が、まさに死を賭して最後のプロテストをしたということがわかってきた。しかし、結局、それは少数派のプロテストにすぎないもので、大多数の中央委員はフルシチョフも含め

て階級闘争激化理論という誤った理論を鵜呑みにしたということが、三七年、八年の大粛清の根本的原因で、その規模というのはいろんな学者によって差はあるが、三百万から八百万ぐらいというふうに踏んでいる。

絶滅論としての階級闘争激化論

菊地 階級闘争激化理論の中味を調べていけば、階級がなくなったという後に出てきた階級闘争の激化論であるし、肉体的に抹殺していくという理論は、当初人民の敵、あるいは反革命で非常にマイノリティであるということ、そういう認識があったゆえに、階級として絶滅するという考え方が成り立ちえた。毛沢東の文化大革命の中における粛清という問題を考える場合に、私は社会主義社会における階級闘争という考え方が出されたことによつて、むしろ、それはスターリン的な人身弾圧という形に転化しないように歯止めがついていて、階級があるかぎり階級闘争があるという立場に立てば、その階級を肉体的に絶滅するということが出てこないと思う。もちろん、党のリーダーの中でも林彪の失脚とか文化大革命の中における、いわゆる実権派の失脚その他、いろんな問題は起きているわけだが、それが党の中枢部からほとんど外には

み出していって、一般の全く罪のない民衆までも包摂していくという形はとっていないという意味で、かなり違うんじゃないかと思う。

中嶋 その辺は議論をしなければならぬところで、スターリンの場合、階級闘争激化論があった。私はその辺はむしろ菊地さんと逆で、毛沢東の場合にも「人民内部の矛盾」論を契機として、社会主義における階級闘争論に陥ったところに、いわば毛沢東の個人崇拜的な文革的な中国的粛清が進むことになったのじゃないかと考える。スターリンの場合に階級がなくなったという前提があって、その中で階級闘争激化論が出てきたということがそもそも誤りであるとすれば、中国の場合でも五六、七年の段階では、階級闘争はもう基本的に終わったといっていないながら、その文化大革命にはまさに二つの路線の戦いとして階級闘争を貫徹させなければいけないという議論に変わってきたわけで、結局、スターリンと同じことになっていっちゃう。

菊地 私の言うのは違うのですよ。どうして違うかというと、三七年三月三日の階級闘争激化理論と俗に言われているが、その理解の仕方は間違いなので、階級闘争激化理論という形で定義づけられるという問題では

なくて、スターリンは一言も階級闘争は激化していると言っていない。三六年、前年に階級はもはや消滅した。全一的な人民になって、労働者はプロレタリアートということではなく、農民もコルホーズ農民、インテリも社会主義的インテリゲンチヤというものになった。こういう考えを出すわけでしょう。翌年の階級闘争の激化理論と全く矛盾しているのではなくて、その階級は消滅したというレールの上に乗って少数のトロツキスト反革命分子がまだいる。それは非常にわずかだ、しかも階級的基盤を失った浮遊分子だ。浮遊分子だけが、非常に危険な存在だから絶滅しなければならぬと提出されたのが階級闘争激化理論で、俗にいう階級闘争激化理論という呼称はみんな不正確だ。

一方、毛沢東の場合は文革の中で確かに、社会主義社会における階級闘争という問題を出したが、これはやはり階級があるという前提があり、しかも絶えず階級が再生産される基盤を持っている。社会主義というのは、共産主義の前の段階であって、不平等社会である。その社会において小消費者意識は広範に残っているわけだし、たとえば自由地の問題にしても、みんなあるわけだ。そういうものを基盤にして絶えず生み出されるブチブル的

意識に対する絶え間ない闘争という呼びかけがある。

中嶋 そのことは大体わかるのだが、中国自身も基本的には階級社会、階級闘争の段階を終わっている。それを終わってないというふうには毛沢東が考えていたところに問題があるのじゃないか。

菊地 階級として存在しているというふうに見て、階級闘争の激化というふうに考えるか。階級は全然存在しないという前提に立って、少数のトロツキストがいるという形で、絶滅の理論を出すのかという違いだ。

中嶋 中国の場合は、毛沢東が、劉少奇に対しても鄧小平に対しても、二つの路線の奇烈な闘争の対象として階級の敵にしてしまった。そこに、毛沢東の大きな誤りがあったわけだ。毛沢東自身は階級闘争でないものを階級闘争というふうに見てしまった。中国の場合、もしもそういう誤りであれば、それはまさに中国共産党がやってきた党内の整風とか、作風を直すということだ、是正すべきところを、やはり党内闘争がからんできたために、階級闘争と見てしまった。毛沢東は文革の中で「官僚主義階級」ということばをつかっている。「官僚主義者階級」などという階級は、社会科学的概念からすればないわけだ

すよ。それを毛沢東の階級闘争論の中に繰り入れてしまっているというところは、文革が地主とかブルジョアジーを打倒する階級闘争でないことの証明ですね。それを階級闘争と規定してしまっただけのことだ。

菊地 いまのお話で、非常に面白いと思っただけは、官僚主義階級という考えを毛沢東が出したとすれば、私の読みこみでは、トロツキイの思想ですね。トロツキイは一九三六年に、奇しくも「矛盾論」を書いた三七年の前年になるわけだが、「裏切られた革命」を書いて、官僚が国家権力を奪取した、すでに労働者は権力から外されてしまった、だから、第二の補足革命、官僚を追い出す革命が必要だということを行っている。

私は毛沢東の考え方を追っていくと、あながた冒頭に出されたように、中国全体がソ連の社会主義建設のパートナーをどういうふうに受け入れたのか、そっくり真似るにしても、それを批判するにしても、ソ連の社会主義建設の経験をかなり踏台にしているということが、はっきり言えると思う。劉少奇路線というものは、結局、ソ連型社会主義のパートナーが妥当であるという考えが出てきたのではないか。だから、いまのソ連の毛沢東批判を見ると、劉少奇路線というのは非常に尊重する

わけだ。

党内闘争は階級闘争か

中嶋 劉少奇については、私にもわからない点があるが、大躍進政策を鼓吹した五八年五月の八全大会第二回大会において劉少奇が大躍進をさかんに主張した。「衆人こぞって焚火をくれば、炎も高し」といって、大衆の能動性に依拠して、大衆運動としてやらなければいけないと、それがいまでは間違いだと言われ、それは毛沢東批判を陰蔽するたぐいに、わざとやっただと言われているのだが、その辺がわからない。劉少奇路線が果して——ソ連型に近いが——ソ連型かという割り切り方にも問題がある。劉少奇は劉少奇なりのものをもっていると思うし、第一、完全にソ連と同じでなかったことは、中ソ論争の過程では劉少奇や鄧小平が第一線に立っていたことでもわかる。そうすると、やはり鍵は、党内闘争ですね。

菊地 中嶋さんが出された問題、こういうふうに考えたらどうですか。党内闘争を階級闘争として毛沢東がとらえた。そういう面は否定しない。これは、やはり党内闘争というものは、きわめて激烈な闘争であるし、しかも、その下にたくさんの党員を抱え、その周

辺に民衆がいるという中で党内闘争は、人内部の矛盾という形でなかなか処理しきれないものがあるから、具体的政治の中では十分起こりうるというように。

中嶋 そこに社会主義に対する根本的疑問が生れるわけで、中国においても、ソ連においても、社会主義的民主主義というものが、制度として確立された。そうであれば、劉少奇の意見であれ、鄧小平の意見であれ、その前の彭德懷の意見であれ、今回の林彪の意見であれ、党の中央委員会において常に論争し、そういう制度的保障をえて、一つ一つ政策をチェックしながら出してくれば、今回のようにまたもや林彪までも失脚することはありえなかったと思う。そこにむしろ問題があるわけで菊地さんのように、党内闘争だからやむをえないという形で考えていいかどうか。

菊地 毛沢東が党内闘争を階級闘争と誤認したという事実を前提にして話せば、党内闘争の背景となった社会主義建設路線の全体を彼は危険なものとして考えていたに違いない。私はその場合に、五六年の段階で、ソ連社会主義はあそこまでできてしまったという直接的反映が毛沢東の意識の中にはあったと思う。

中国は、ソ連における特権階級の発生ということを言うわけですね。はっきり言えば、ソ連共産党批判の第九評論文と、三〇年前に出されたトロツキーの「裏切られた革命」、ヨーロッパ的な視野では、ロシア革命五〇周年の一九六七年にスージーとヒューバーマンが出した「ソ連の経験の教訓」、この三つが全部同じだ。基本的な点では、特権階級が生まれて階級になろうとしているというのがヒューバーマン、第九評論の場合には、あれは毛沢東が書いたと言われるが、特権階級というのが、やはり生まれている。資本主義へと逆行しているという。三六年にトロツキーの提起した問題から、六七年段階までに出された論文の底をつらぬく共通点が重要なのです。社会主義についてバラ色の理論をアメリカで高く掲げたマルクス主義者達が、わずか一〇年後には、そういうグルーミーなベニスティックな考えを出し、さらにまた、中国でも同じような認識に到達したという、それが私は毛沢東の危機意識みたいなものに結びついていったと考えざるをえない。

権力奪取後の毛沢東とソ連

中嶋 権力をとったあとの毛沢東というのは、かなりスターリンのやり方と似てきたと

思う。菊地さんは毛沢東がソ連の特権階級と
いうところから、資本主義への逆行という認
識に到達していったのではないかといわれた
が、一面で、ソ連との利害の対立からソ連憎
しという気持から言った点があると思う。ス
ターリンと毛沢東とは、中国革命の段階で
もけっしてうまくいっていない。毛沢東は、
スターリンを必ずしも快よく思っていないか
た点がたくさんある。コミンテルンとの関係
でもそうだった。ところが、四九年に革命が
勝利した後に、毛沢東はスターリンに認知さ
れるのじゃないか、大変偉大なことをやった
という自負の念をもって、四九年一二月にソ
連に行った。その時、中ソ友好同盟条約が結
ばれるのだが、あれについては、毛沢東が未
公開文献のなかでこう言っている。

あの時は大変だった。スターリンが何しに
きたというような顔をした。一二月の暮に行
って三月に帰ってくるのだが、二カ月以上か
かっている。延々と交渉があって、結局、う
まくいかないために、毛沢東は周恩来を途中
から呼んでいる。二カ月もかかっているの
に、スターリンに何し来たかという顔をされ
て、中ソ友好同盟条約というのは、毛沢東に
とっては非常に苛酷な条約だった。あの時、
いろんな借款とか援助を決めたが、あの時ソ

連はコメコンを収奪したと同じようなことを
中国にやろうとした。そのほかに新疆省あた
りに合弁会社を幾つか作ったり、旅順、大連
の海軍基地をそのまま保持しようしたり、
いろいろやった。それで、毛沢東はスターリ
ンに対して憎しみを感じる。やがて朝鮮戦
争。毛沢東は、朝鮮戦争についても、ソ連はあ
のとき死の商人であった、と言っている。そ
れから満州の利権をめぐる中ソ関係もある。
だから、毛沢東はスターリンが死んでほっ
たのではないか。この後、五四年に中ソ諸
協定が大幅に修正された。それで、五〇年の
中ソ協定によって、ソ連が新疆やなんかにつ
くった合弁会社を全部引き揚げて、持株を全
部中国に返す。その頃には旅順、大連も返っ
てくる。その時、初めて中ソ間の平等な関係
に近くなる。場所も初めて北京で交渉が行な
われた。フルシチョフ、ブルガーニンなどが
来て、その時は和気あいあい毛沢東もフル
シチョフにはかなり期待しておった。

菊地 五六年のフルシチョフ秘密報告に対
するプロ独裁の最初の論文、「歴史的経緯に
ついて」、あれなんかはフルシチョフがやっ
たことを一定程度評価していますね。

中嶋 五六年になってまた評価するのです
ね。ところが、それが、やはりモスコに五

七年に行って中ソ新軍事協定を締結するでし
ょう。それによって毛沢東はソ連から核の供
与を受けるということを考えた。ところが、
やがて五八年に台湾海峡の危機の問題があ
り、中東紛争などが加わって、うまくいかな
くなる。しかも、五八年にソ連は、中ソ連合
艦隊を作って、第七艦隊に対抗せよとか、そ
の司令官にはソ連人がなるとか、中国の中に
基地を設けさせよとか、いろいろ出した。そ
れやこれやで、フルシチョフに対しても怒り
心頭に発して、ますます対ソ不信に陥る。そ
のうちに、中ソ新軍事協定をソ連が破棄して
しまつてから、ほんとうにソ連不信に陥って
しまふ。ソ連というものの本質を資本主義ブ
ルジョアジーの国だという形や批判になつて
きた。だから、一般的にはその辺が明らかに
なっていないが、そう単純なものでもない。一
時的には中国もフルシチョフをかなり評価し
ていたのだから。

菊地 それは、そのとおりだと思ふ。中嶋
さんがいわれたように、いわゆる政治、外交
面でだんだんとフルシチョフに裏切られた結
果として、ソ連の社会体制批判というふうにな
って来るといふ側面は一つあると思う。同
時に、なぜスティーシーやヒューバーマンが三
六年前のトロツキーの評価と類似してきた

かという問題が一つあると思う。これは、社会主義のとらえ方が歴史的方向性において、ソ連のスターリン、その後のマレンコフ、ブルガーニン、フルシチョフという歴代のリーダーを含めて、やはりソ連社会主義というものが、かなり問題をはらんできた。つまり、人民内部の矛盾として処理される段階を過ぎ、かなり特権的な次の支配層と一般民衆との間の隔絶が広がってしまった。ヒューバーマンとスージーが一番強調しているのは、非政治化という問題ですよ。一般民衆の政治に対するコミットというのはないわけです。ベトナムに対するソビエトの軍事援助にしても、ソ連の民衆は、どこまでがああいうベトナムへの支援に関心をもっているか。それはそれとして、そういう政治の面でフルシチョフに絶望してくるということと同時に、ソ連社会主義のパターンが、ある一つの結果を生み出した。五〇年ならば五〇年経って一つの結果を生み出した。その結果をフタを開けてみれば、社会主義を考える者にとってはデメリットのほうがむしろ多いというソ連型パターンの在り方に対する批判というのは、理論としても認識されたのじゃないか。そういう意味では中国は、ソ連という経験を踏まえることができるという、後進国というのがあと

から進む者の特権を手に入れているということとを中国にも認めるのです。

中嶋 その場合に、やはり文革につながるわけだが、そこで、私は菊地さんのソ連批判は大部分納得できるのですが、毛沢東肯定、ことは悪ければ、文革に新しい変革のエネルギーを見つけたところにはまったく賛成できない。この問題と関連して、菊地さんは、さきほどスターリンの個人崇拜と三〇年代の粛清についてふれられた。しかも、悲劇的なことには、まさに重工業中心に新しい社会を建設していくという段階にそれが起こっている。中国の場合にはそれに対する自覚があったし、社会主義の矛盾についても初めは指導者側で自覚していたが、中国の場合の個人崇拜について、私がスターリンと違うと思うのは、菊地さんは中国の場合は弊害が少ないと言われたが、毛沢東の場合は、毛沢東自身がまさに革命の指導者で、もの凄く大衆的支持をえてきただけに、非常にある意味では、毛沢東に対するエモーションナルな要因とか、大衆の信頼とか、そういうものが個人崇拜体制に密着しているだけに、よけいにマイナスが大きいんじゃないか。というのは、いわば家父長体制みたいなものをふくんでいるわけです。党内で論争すべきことが、常に毛沢

東中心のグループを作って、それだけが唯一の正義の味方であって、それ以外のものは敵だという形にされてしまう。

文革だって考えてみると、側近政治ですね。ことは悪いけれども、実際にそうなんだ。しかも、毛沢東の政治秘書であった陳伯達を文革小組の組長にして、あれほどの指導をやらせた。そしてまた、自分の奥さんの江青しかり。姚文元が娘むこだと言われているし、林彪はああいう形で葉群夫人まで政治局委員にしている。全国婦人連合会会長ぐらいにするならばともかく、文革の指導者にする。江青の場合は、軍の文革、小組の顧問にまでなる。そういう形でコミットさせていて、いわば家父長体制が生まれてくるところが、まさに中国的個人崇拜だと思う。確かに中国の場合、肉体的圧迫はしない。武闘によるのは別とすれば。しかしながら、ほんとうは中国の下級幹部に至るまで、文革では敵か味方かという形で、追求され、一たび敵とみなされれば、ものすごくきつめな思いをさせられる。特にインテリの場合はそうだった。しかも一時的には、毛沢東を支持した紅衛兵などによって痛いめにあわされてつるし上げられ、みせしめにさせられた。いまになると紅衛兵運動のああいうのは、五・一六兵団を中心と

する極左派がやったんだという形で、陳伯達以下全部消えちゃっているわけだ。文革の時の陳伯達と文革小組の主力、閔鋒、戚本禹など中堅的指導者が全部消えている。かれらが消えた上で、今度また林彪事件が起こっているわけだから、やはり、血が流れる、流れない以上に、勸善懲惡とか、道徳主義の要素が権力と結びついているだけに問題が多いのじゃないか。

社会主義的民主主義は開花したか

菊地 ある程度わかるのだが、社会主義における民主主義ということは、抽象的にはいくらでも考えられるわけですよ。一般的定義からいえば、資本主義よりはるかに徹底した民主主義だ。それは直接民主主義という、たとえばソビエトであるとか、レーテであるとかという形で形式化されている。私は、理論としてそういうことは言えるとしても、歴史的な体験として、社会主義社会というのがまだ生まれて半世紀にしかならない。より徹底したデモクラシーが、社会主義では必然的であるということ、理論として言えても、実際にはうまく機能していないということは認めざるをえない。ソ連の場合でもそうだし、中国の場合でもそうだと思う。

ただ、そういう悲劇的体験を踏まえながらも、民衆がどこまで政治に発言し、官僚を引きずり下し、あるいは党を批判しうるかということが、私にとっては一番大事な問題ですね。党内闘争という形で、党内での家父長的な体制とか寡頭政治であるとか、個人崇拜であるとかというようなことは確かにあるが、では、ソ連でスターリン時代に大衆が官僚を批判するということは可能だったかといえば、全く大衆は沈黙し、できるだけ政治から遠ざかるという姿勢をもつなかで、粛清が拡大されていくという事態が進行したのであって、中国の文革の中で民衆は甦らされていると言う人もいるが、紅衛兵なり造反した労働者達にとっては、今後も社会主義における民主主義を保障しうる運動、あるいは経験としていずれ生かされうるということを信ずるといふことしか言えない。毛沢東は革命のリーダーであり、社会主義建設のリーダーであるから、スターリンに比べて危険度が大きいということには確かにあると思う。それと同時に、ほとんど文盲だった民衆が字を書き、大字報をはりつけ、党幹部なり自分の上役を批判したという経験が、私はやはりある程度は定着するのじゃないかと思う。

中嶋 ところが、経験が定着しないのです

よ。エフトシエンコが、「紅衛兵よ、毛沢東を殴れ」と言ったでしょう。エフトシエンコというのはああいう人だから、いまではかなり体制側に立っているが、とにかく紅衛兵運動の段階でああいうことを吐いたので、そういうことが徹底していれば、経験が定着するかもしれないが。毛沢東が権力を持っているながら、毛沢東自身の権力を奪回する運動でありながら、大衆をそれに巻き込んでいったところに、文革の大きな限界があるわけで、自然発生的な大衆運動であり、官僚主義批判であるとはいえない。

官僚主義が生まれたことは事実であって、まあいう文革という形でなくて、中国がやってきた批判と自己批判、団結——批判——再団結とか、そういうことで克服できるのが従来の毛沢東の政治ではなかった。劉少奇を打倒しなければいけないということになると、劉少奇を打倒した後は、もはやそういう下からの大衆的な自発的な批判というのは、いわば権力を奪回した支配者にとっては、危険なことになるわけだ。だから、五・一六兵団という形で全部やつつける。また、上海の労働者がコンミューンを言った時に、毛沢東が、そういうのはけしからんという形で抑圧する。文革後の党は三結合どころか、

軍幹部プラス党プラス行政官僚、その幹部というのは、党書記の九〇%以上が軍幹部で占められ、党の第一書記を見てみると、二人のうち二人は軍幹部だ。

挫折したか、毛沢東の理念

中嶋 毛沢東の理念が挫折し、文革の理念が挫折し、カルチュラル・レボリューションでなくて、まさに党内闘争であったにもかかわらず、文化革命という名前を冠しただけ、かえって「犯罪的」だというふうにしから見られない。菊地さんの期待されたような体制が定着して、少なくとも革命委員会というものが、そういう大衆造反、大衆を中心とする新しいエネルギーを集結して定着してくればとにかく、まったくそうではないのだから。

菊地 私は、社会主義における民主主義というものを原点に立ち戻って考えていくと、非常に歴史的体験に乏しいと同時に、非常に危険性をもっていると思う。社会主義における民主主義の問題は、ごく常識的に言えば、社会主義における民主主義を口実にして、プロレタリア独裁国家における抑圧された分子、旧ブルジョア分子、旧資本階級というものが復活する危険性がある。理論的にははっきりそう言える。だから、独裁が必要である

という考えになるわけで、同時に小市民的な意識が絶えず復活してくる。いまのソ連をこらんなればわかるように、社会主義から共産主義にいくとリーダーは叫んでいるが、私は、とんでもないことだと思ふ。ますます共産主義から遠ざかってきている形での小所有者意識の氾濫があると思う。これは、ソ連社会主義をどう見るかにつながるわけだが、毛沢東路線で、人民内部の矛盾として処理しうる、たとえば官僚の問題に対して、確かにそうあってほしいわけだが、実際には、社会主義における批判が人民内部の矛盾だから、徹底的に議論しあって解決しようということになればベターだが、また、そういう人民内部の矛盾というものは機能すべきはずなんだが、権力を握っているものに対して批判すれば、反革命という烙印を押されやすい。文化大革命の初期に最初に造反した人々は、ほとんど反革命という形で、劉少奇一派にやられているわけで、文革そのものを理想化するという気持はないが、少なくとも、ああいうレボリューションというものはソ連社会主義では一回たりとみられなかった。だから、全的否定はしない。むしろ、そこにデメリットもあるが、メリットのほうをはるかに大きい。パーマネント・レボリューションとしてとら

えるわけだ。

中嶋 今の段階でも、そういう風に言えますか。

菊地 私は、ますますその信念を固くしている。歴史的体験とはそういうものじゃないのですか。たとえばスターリンのパーシがある。大粛清があれば、中国はそれを学ぶ。学んでも完全にパーシを再現しないということには必ずしもならないわけで、中国の後に出てくるある社会主義国は、また中国の経験を学ぶ。そういう形で社会主義建設というのは進んでいくのだ。

中嶋 もちろんそれはそうだが、菊地さんがソ連を批判するのは、ソ連社会そのものが、もつと違った正しい道を歩むために批判するわけで、後から生まれてくる社会主義のために、いまのソ連は非常に悪い状況でもよいということじゃないと思う。まさに中国についてもその点をいいたいわけだが、菊地さんの議論の中で、私が非常に危険だと思うのは、一方では社会主義的民主主義という面があるべきだという理念を認めながら、それは非常に困難なものであって、文革みたいな形である場合には押えていくことがありうるといふふうに考えられる。そこが危険なところだと思ふ。

菊地 押えるということではない。私は、文革の過程全体が民主主義を押しやるものでなく、むしろ民主主義を發動したとみている。

中嶋 ある一定の局面においては、まさに毛沢東が党内でもって少数派になっていて、奪権する過程では、そこに民主主義を發動したような形をとった。だが、毛沢東が復権した後にはそれが必要でなくなったという形で押えている。

菊地 押えても民衆の経験というものは押えきれぬものじゃない。

中嶋 そうだとすると、毛沢東自身が大衆に乗り越えられるということになる。

菊地 もちろんそうです。

中嶋 私も、その点は将来いつかはそうなると思う。

菊地 そのバイタルなエネルギーを民衆が蓄積したことになるわけだ。ある意味では、毛沢東のやった文化大革命というのは、両刃の剣みたいなところがある。

中嶋 だから、コンミュニオンへの動きを押えた。

菊地 いずれ、民衆が毛沢東批判を行なうときもある。それが社会主義における民主主義のあり方なのだから。

中嶋 それにしても、文革というのは、あまりにも代償が大きかった。中国の民衆というのは、林彪の失脚でほんとうの政治不信に陥ったのじゃないか。

菊地 そうだろうか。ソ連的なヒューマン、スイーシーが警告を発している非政治化とそれから中国の、かりにあなたのおっしゃるような非政治化が起こっているにせよ、全然異質だと思う。

中嶋 確かに異質だ。中国人というのは、元来が権力批判の思想をもっている。「帝力いづくんぞ我にあらんや」という思想ね。国家主席が敵になる。林彪は陰謀家、反革命分子になってしまった。そうすると民衆は、あれは帝力を中心としてやっていることであって、自分達には関係ないんだ。自分達は自分の生活を守らなければならないということになると、結局は、面従腹背にならざるをえない。だから、赤旗をかかげて赤旗に反対している者がいると、「人民日報」は毎日やっているわけだ。

お祭り騒ぎこそデモクラシー

菊地 私は、社会主義における民主主義の在り方について、そう樂觀はしていない。たとえば五六年のハンガリー暴動にしても、五

八年のチェコの問題にしても、民衆が立ち上がって反革命分子として処断される覚悟で、しかも武力で弾圧されるという、後に手直しされるという形。つい最近のポーランドの暴動もそうだ。クリスマスイブの時に一斉に物価を引き上げるといふ無神経なことを権力はやる。そして、暴動が起きる。それは軍隊に鎮圧されてしまうが、その後で、いろんな労働組合のリーダーやなんか引っぱり出されてくれば、労働組合のリーダーと労働組合員と何年来会話をしていたというところが明らかに。

そこでは、民衆の捨身の真の社会主義をめざす抵抗が流血と悲劇に終わったあとで若干の手直しが行なわれるというような状況ですよ、はっきり言って、社会主義の民主主義的な前進というのは、だから、中国の場合も今度の文革で、さまざま民衆がワイワイ言いながらやった。まるでお祭り騒ぎで、お祭りと思えない。山車を出して太鼓叩いて、ああいうことがデモクラシーだと思う。デモクラシーというのは、秩序だったものではない。平凡な主婦が屋根の上のぼって、日照権のためにビルの建築を反対するとか、こっちは騒音の反対をするとか、半ば暴動状態になっているのが、デモクラシー。

中嶋 その場合に、確かにその局面はデモクラシーだが、本質的には違う。ある意味では、中国政治あるいは中国社会に対する認識の違いだろうと思うが、やはり、「帝力いづくんぞ我にあらんや」という伝統があればこそ、いわば政治というものがなしうる限界を知っているわけだ。

だから、天安門の上から林彪が毛沢東語録をふりかざせば、ふりかざしちゃうわけですよ。一方、林彪のつい一年前の写真を見れば、毛沢東と並んで写っているわけですよ。しかも毛沢東語録は林彪のことばによって、

個人崇拜と毛沢東語録の役割

菊地 毛沢東語録に対比されるソ連のスターリン語録といえは、これはやはりポリシェビキ党小史です。あの時の大々の普及運動というのは、まさに初期の毛語録を普及する運動に匹敵するようなものだった。しかし、あれは全然定着していない。というのも、あれはモラルの書でないから、つまり、ポリシェビキの党の歴史の中で、スターリンがいかに偉大であったかということ歪曲して出しているだけだ。ところが、毛語録がいろいろ歪曲されているとか、重要なところが抜けてい

あれほど浸透したわけだ。最近の「人民日報」は、明らかに林彪を指して、党内に巢食っていた陰謀家、野心家だといひ、その末路は、骨と肉がちりちりになって墓場もないのは当然であるというふうに書いています。一体中国の民衆はどういうふうに感ずるか。私はその点を深刻に感ずる。

菊地 私は逆に、民衆の側から考える。どんな社会主義になっても、どんなリーダーが出てこようと、民衆にとって不満だったらやっつけろ、その権利は民衆にあるというのが、私の考えだ。

ということがあっても、私は毛語録というのは、あれなりに完結したものとしてみれば、けっしてあれが浸透することが悪いことではないというふうに考えている。あれだけ毛語録を振っていても、実際には、民衆が、面従腹背で適当に振っていなければ危いと感じるという知恵もあるだろうし、逆にあれを読むことによって教えられる、毛語録に沿って行ないを正そうという人も生まれるだろう。それもデメリットではない。ソ連のスターリン語録ほど無味乾燥なものでないし、

あれは一つのモラルの書であるというふうにとらえる。だから、あれの浸透がどうであれ、若い人々があればによって教育されてくるということの効果は、むしろメリットとして評価したいというふうに考える。さらに歴史における個人の役割というのはむしろわすかしいわけだが、ただ繰り返しておきたいのは、スターリンと毛沢東になると、その評価の点では一致するわけで、毛沢東の果たした役割というのは、スターリンと比べるべくもなく、大きいということはあると思う。

モラルの書なら危険はないか

中嶋 「毛沢東語録」がモラルの書だということとは認める。われわれが利用してもよいと思うのです。まさに中国では活学活用とあって、卓球をやる時にもこれを読むとか、あらゆるところで、やっているのはご承知のとおり。だが、それはある意味では俗流大衆路線にもなりうるわけで、日本の経営者が自分の会社をよくするために、毛語録を利用するのと同じことになりかねない。そこに問題があるということは、それは権力を持っているものが、あるいはまた林彪のような人物が、それをさかんに鼓吹する運動を起したということに、やはり問題があると思う。

ほんとうのモラルの書であれば、上のほうからこれを一齐に読めとやるべきものかどうか。それがほんとうにモラルを高めることになるかものかどうか。一方において、林彪事件はいったいどうなんだということを、大衆が話し合える基盤があればいいが、今の中国でそんな基盤は全然ない。そういう中でああいうものが浸透するところに、中国人の政治不信の現われがみえる。ある意味では、日本の戦時中の教育勸語と同じようなことになるような危険性をもっている。

菊地 教育勸語とは全然違う。機能としてはそういう機能を果たすかもわからないが、機能というヤツは中味によって規定されるわけだから。

中嶋 いや、思想やモラルが非常に実利主義的に利用される危険があるわけだから、その点では同じでしょう。

菊地 私は、学生が本を持って行って返さない時は、毛語録を読めというわけですよ。借りたものは必ず返せと書いてあるじゃないか。

中嶋 そういう意味ではよい書ですよ。菊地 中国の民衆というのは、なかなかしたたか者だし、賢明ですよ。ある意味で指導者なんかよりも。それほど僕はベシミスティックに陥らない。ソ連の場合は、今、反体制運動をやっているインテリを見ると、ほんとうに絶望的ですね。

中嶋 中国にもいつかチェコ事件が起こることによって、毛沢東が乗り越えられ、歴史の中に相対化されるだろうと私は見ている。

菊地 その点は、私も賛成ですよ。毛沢東が相対化される時期は必ずくる。

中嶋 チェコ事件の萌芽のようなものは五七年の放鳴運動の時にあった。中国が非常に国際社会に出て行っている状況の中に米中接近みたいなものが進められて、チェコのな行き方というか、もっと違った要素がかなり入ってくるのじゃないか。

菊地 私もそうだと思う。チェコ事件の際、私は中国共産党が、ドブチェクをフルシチョフと同じ次元で批判しながら、他方、民衆の蜂起というのを支持したというのは、ドブチェクを支持しているのは、チェコの民衆自身だから、ドブチェクとチェコの民衆を分けるのはおかしいと最初思ったが、結局あれは権力に対する反乱という面での評価ですね。

中嶋 ドブチェクはなお悪いという評価ですね。ゴムルカが失脚したポーランドの政変についても、暴動を起した民衆はけしからんという評価ですよ、中国は。

菊地 ドブチェクを支持した民衆の間に出てきた党批判と、党員自身の今まで硬直化した党組織の在り方に対する自己批判というのは素晴らしいですね。ああいう芽が、軍事権力に弾圧されるということではか矛盾に気付かされないということは……。

中嶋 その点では文革でも奪権闘争の段階で、全部軍が入っている。完全な軍事管制ですよ。

菊地 いや、そういう見方はきわめてソ連的な見方なので、ソ連は中国人民解放軍をソ連軍と全く同じものと見るわけだ。中国の人民解放軍というのは、軍隊ではあるが、その形式、構成内容については、ずいぶん異質であるというように考える。

中嶋 革命の段階でなくて、いまでも人民解放軍をそう思うのですか。

菊地 今でもそう思う。

中嶋 今の段階の、軍人は軍人としてずっと育ってきているから、むしろ兵營國家的体質があるのじゃないか。それが強すぎたからこそ、林彪以下をやったのじゃないのですか。

菊地 私はそうは考えない。やはり軍隊という問題を一つのテーマにしてまたべつにやりたいと思うが。